

講演概要

演劇はまちを変えるか ―多様性を受け入れる―

中貝 宗治（元豊岡市長／一般社団法人アートアクション理事長）

豊岡は、「深さを持った演劇のまちづくり」を進めています。

これまでに、出石永楽館の復活と永楽館歌舞伎の開催、滞在制作の拠点・城崎国際アートセンターの設置、学校における演劇的手法によるコミュニケーション能力向上の取り組みや非認知能力向上の取り組み、芸術文化観光専門職大学の誘致、豊岡演劇祭の開催等を実現してきました。

「深さを持った演劇のまちづくり」は、文字通り、演劇やダンスなどの舞台芸術をまちづくりに生かそうという試みです。それは、ただ単に「人々が演劇を楽しんでいるまち」ではなくて、①演劇の創造の地であり、かつ、②演劇が、観光、教育、介護など様々な分野で役割を果たし、地域に根づいているまちを創る営みを言います。

もしそんなまちが本当にできたとしたら、それは豊岡の強烈な個性の一つとなって世界の人々を惹きつけ、「小さな世界都市」実現のための強力なエンジンになるはずです。

それだけではありません。

創造性を競うアーティストやアートは、既存の社会の「当たり前」にとってなにかしら「異質」です。

「異質」なものを見続けることによって、「分からないもの」の存在を許容する「寛容性」が養われます。

寛容なまちに、多様な人々がやってきます。

多様な人々が触れ合い、交わると、創造性が触発され、新しい価値が生まれ、イノベーションが起こります。

他方で、多様性は厄介です。互いに異なるので、合意形成ひとつとっても大変です。多様性は、容易に「分断」に持ち込まれます。

多様性を活かすにはスキルが必要です。

そのスキルが、コミュニケーション能力（他者の言葉に耳を傾け、キャッチボールをする能力）、他者と協同する力、自己をコントロールする力、答えの見えない時間の経過に耐える力、等々です。

豊岡の子どもたちは、その能力を演劇ワークショップによって身につけています。

芸術文化観光専門職大学の学生たちも同様の教育を受けていて、卒業生も市内に就職しつつあります。

「深さを持った演劇のまちづくり」は、地域社会の寛容性を育み、多様な人々を受け入れ、さらに進んで、多様性を創造性やイノベーションの基礎として生かすことができるまちに

豊岡を導くに違いないと考えています。

コウノトリも住めるまち＋アーティストも住めるまち＋女性も住めるまち＋障害のある人も住めるまち＋認知症の人も住めるまち・・・というふうに、排除ではなく、足し算のまちにしたいと考えています。